

⑩リンゴ品種開発

リンゴ生産量で日本一を誇る青森県。リンゴ王国とも称される青森の多様な品種開発を支えるのが、県産業技術センターりんご研究所（黒石市）だ。近年は落果防止剤が不要で生産者が作りやすい早生品種や、長期貯蔵に適した品種など、生産面や販売面の課題に対応した新品種開発に力を入れている。

品種開発は1978年に始まった。品種登録まで至らなかった物も含めると、これまでに46種類のリンゴ

挑め!

壁の向こうへ

青森県産業技術センターの研究

選抜、登録まで20年超

生産、販売のニーズに対応



生産者の園地で行われた品質評価試験（青森県産業技術センターりんご研究所提供）

が誕生している。大玉で味が良い「世界」、早生のた。主力品種「つがる」、台湾など海外で需要が高い黄色品種「玉林」など、個性あ

の種をまいて1品種できる。かじろかの確率が「苦丹は多い」と語る。実がなる木ができるまで数年かかり、収穫は1年に1回。コメや

他の作物と異なり、試験を短期間で繰り返すことのできる。種の交配から約5年後に最初の選抜試験では、



2018年に品種登録された「紅はつみ」（青森県産業技術センターりんご研究所提供）

◆青森県産業技術センターりんご研究所 1971年、旧黒石町（黒石市）の県農事試験場でリンゴの専門的な試験研究が始まった。31年にリンゴ専門の研究機関「県果実試験場」として独立。50年に県農事試験場りんご試験場と名称を改め、68年に現在の庁舎が完成し、旧庁舎が史料館となった。2009年の地方独立行政法人化で現在の名称になった。

さまざまな品種の交配で生まれた800個体を対象に、外観、食味、さびやつの割れといった障害を確認し、約10個体まで絞る。交配から約11年後に始まる選抜は、個体を増殖して果実の品質や障害の発生状況、貯蔵性などを数年かけ、年ごとの変化などを詳しく調べる。

※第1月曜日企画

令和4年2月7日 デーリー東北 掲載

※この画像は当該ページに限ってデーリー東北新聞社が利用を許諾したものです